61st GALAXY AWARDS ギャラクシー賞 贈賞式

放送評論家、ジャーナリスト、研究者などが集まり、メディア関連の団体などから支援を受けて活動する放送批評懇談会。61年の歴史を刻む同会が顕彰するギャラクシー賞は、放送業界における「国内最高の栄誉」とも称される。5月31日、その第61回贈賞式が都内で開催された。

「信頼されるコンテンツが改めて見直され、注目される状況がある。入賞作はまさに今を象徴する骨太の仕事が多い」と主催者挨拶で語った音好宏理事長の言葉を体現する作品や人物が、会場に集った約600人とライブ配信で視聴した約8000人が見守るなかでスポットライトを浴びた。

賞に応募・選考に参加した作品は、4部門合わせて836本。ステージではCM、ラジオ、報道活動、テレビの各部門入賞作品が表彰され、大賞・優秀賞・選奨はその場で初めて発表。DJパーソナリティ賞、志賀信夫賞、個人賞、特別賞、フロンティア賞、マイベストTV賞グランプリの受賞者もステージを飾り、晴れがましさと誇らしさを湛えた笑顔が並んだ。

テレビ部門

❖テレビ部門・大賞

連続ドラマW「フェンス」でWOWOWプロデューサー高江洲義貴さんに続き、NHKエンタープライズ北野拓プロデューサー（右写真・左）、脚本の野木亜紀子さん（右）も登壇した。トロフィーを手にした高江洲さんは「北野さんと野木さんが沖縄の人たちの気持ちを掬い上げてくれ、プロデューサーというより『ウチナーンチュ』としてありがたかった。監督やキャストを含め、チーム一丸となって困難な問題に正面から取り組めた。心から感謝を申し上げたい」と涙ぐんだ。

北野さんは「沖縄放送局で記者をして、目の前で米軍の事件事故が起きても思うように捜査できない、裁けない現実をいつかドラマにしたいと思っていました。復帰50年のタイミングで野木さんに声をかけたんですが、やはり成立するのに難しい企画で、普天間出身の高江洲さんが頑張ってくれてなんとか成立しました」と経緯を話した。

野木さんは「沖縄にはドラマで扱ったこと以外にもたくさん問題があって、絡み合っている。背負うものが大きすぎて、実は1回断って、時間をかけて説得されたんですが、やはり非常に苦しい作業でした。北野さんと高江洲さんに支えてもらいながら、脚本家としてなんとかエンターテインメントの形にでき、大賞をいただいたのが本当に本当に嬉しいです」と感慨深さをにじませた。

❖テレビ部門・優秀賞

NHKスペシャル「“冤罪”の深層～警視庁公安部で何が～」チーフ・ディレクターの石原大史さん。「警視庁公安部が捜査の中核にある冤罪事件。公安部は外の目が届きにくい組織なんですが、事件を引き起こした具体的な証言や物証が出てきて手応えが生まれました」と取材の過程を振り返った。

福岡放送**「ナンデモ特命係発見らくちゃく！～28歳の小卒女性SP！完全版～」**は「13年間、細々と視聴者の夢を叶えてきた深夜番組。壮絶な人生を歩む依頼者の、ただ学校に通ってみたいという願いを叶えてあげたいという試みだった」とディレクターの轟木洋志さん。

原爆投下後の撮影場所を特定する緻密な作業を追った**「ながさき原爆記録全集 山端庸介原爆全写真 被爆翌日117枚全解析」**。長崎ケーブルメディア放送部部長の斉藤礼子さんは「本当にいろんな方にお世話になった番組」だと、関わった一人ひとりの名を挙げて感謝した。

テレビ部門

❖テレビ部門・個人賞
神木隆之介

トロフィーのバードマンを手にした神木さん。関係者への謝意を表した後、バードマンに視線を落としながら「今日はこの嬉しい気持ちを胸に、この子と一緒に寝たいと思います」とチャーミングなコメントで笑いを誘った。「らんまん」チーフ演出のNHK渡邊良雄さんがお祝いに登場すると、「わっ！ 良雄さん。ほんとに、すごくお世話になったんです」と嬉しそうに花束を受け取った。

司会者が渡邊さんに、「らんまん」でグッときた神木さんの演技について尋ねると、

渡邊「19週の前に長女の園子ちゃんが病で亡くなり、二人がどうやって立ち直るかを月曜日一日で表現する回があった。現場で台本の相談を長田（育恵）さんにして……」

神木「本当によく考えてセリフをいろいろ書いてきてくださったのに、沈黙のシーンにしてもらった。長田さんにどれだけ頭を下げればいいのか。でも、いっぱい議論させていただいた」

渡邊「15分という時間に3分ぐらい無言の芝居があって、神木さんと浜辺（美波）さんの演技力で乗り切ってもらおうと思いました」

神木「それをよしとしてくださった監督の、そして現場の器の広さに感謝しています」

と、印象的な場面の撮影秘話をライブで披露してくれた。

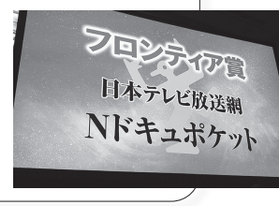
左）壇上に向かう神木隆之介さん
右）祝辞を述べる NHK 渡邊良雄さん

フロンティア賞

Nドキュポケット

「私はNNNドキュメントが大好きなんです。日本テレビ系列各局が熱い思いで作っているのに、日曜深夜で見てくれる人が少ないのがすごく悔しかった」から、その縮尺版をYouTubeに配信し始めたと語るNNNドキュメント・プロデューサーの今村忠さん（右写真・右）。「2019年末に（ディレクターの）斉藤（真也）と二人で始めたんですが、『30分や1時間もある番組をたった3分、5分に短くするなんて、できるわけないだろう』という目で見られ、それでも『スマホでも見られるNNNドキュメントにしたいので協力してください』と言い続けているうちに支持されるようになりました」と受賞の喜びを噛みしめた。

斉藤さんは「ネットユーザーに刺さるように、強い言葉や映像を使い、電車に乗った一駅分で涙が出てしまうような作りにしています」と裏話を明かした。



ラジオ部門

❖ラジオ部門・DJパーソナリティ賞　オードリー

「オードリーのオールナイトニッポンin東京ドーム」で、ライブビューイングと生配信合わせて16万人を熱狂させた二人。その実績を評価されたことを受けて、若林正恭さんは「ついこないだ東京ドームでイベントやったんで、今日の会場ちょっと狭く感じますけども……」と会場を沸かせた。ピンクのベストに身を包み、お馴染みの歩き方で登場した春日俊彰さんも、満面の笑みで人差し指を上げて「DJパーソナリティ賞、いただきトゥース！」と力強い一声。

司会者から、お二人に憧れてこれからラジオを目指す次世代のパーソナリティに励ましの一言を、と促されると、春日さんが「春日を目指す人はたくさんいると思いますが」と応じ、すかさず若林さんが「いないと思います」とツッコむ。春日「春日を目指しても、春日のことは超えられないから」、若林「超えたくもない」、春日「憧れるのをやめましょう」、若林「大谷翔平さんですか」と、ラジオさながらの掛け合いを披露。終始たっぷりのサービス精神で盛り上げた。

志賀信夫賞

関口 宏　タレント・司会者・俳優

司会を務めた「サンデーモーニング」（TBSテレビ）について、「終わってみると長いですね。始まったのは昭和で、スマホもケータイもなかった時代。私は飽きっぽい性格なんですが、飽きなかった。それだけやりがいのある仕事だったのかな」と番組を振り返り、「BSで新しい番組を始めたんですが、36年半の穴がぽかっと空いたところはまだ埋まってない。どうしても情報番組を見て、これはどう扱えばいいのかなと考えてしまい、もう考えなくていいんだと思うと寂しい」と今の気持ちを語った。

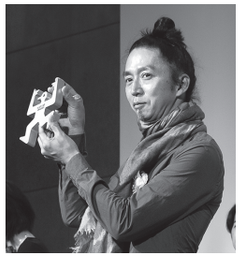
「サンデーモーニング」で印象深いエピソードを、と尋ねられると、「一言じゃいえません」ときっぱり。これから司会者を目指す人たちに贈る言葉を、と向けられると、「なるべく自然におやりになってください」と穏やかに答えた。

CM部門

❖CM部門・優秀賞

電車で通勤・通学する父と娘の12年をワンカットで表現した**相鉄東急直通記念ムービー「父と娘の風景」**。相鉄ホールディングス経営戦略室第三統括担当課長の塩﨑匠さんは、喜びを隠しきれない表情でトロフィーを手にした。

コロナ禍を経て日常が戻り、マスクをはずして笑顔を見せあえる社会をキンチョウならではのテイストで表現した**蚊対策「マスクをはずして」シリーズ**。大日本除虫菊の宣伝部課長の小林裕一さんが、しっかりとトロフィーを受け取った。



海賊版を読むのを「やめよう」ではなく、正規版を読んでくれて「ありがとう」とアピールした**ABJ STOP海賊版「ありがとう君の漫画愛」**。膨大な人気漫画を読み込んだ労作を指揮した博報堂クリエイティブ局クリエイティブディレクターの井口雄大さんが登壇。

❖CM部門・大賞

ティロリ音をYOASOBI『群青』×Vaundy『花占い』でマッシュアップし、若者の迷いと解放を描いた**マックフライポテト「ティロリミックス」**。日本マクドナルド取締役上席執行役員CMOのズナイデン房子さんは「この作品を作るにあたってクリエイティビティが持つ無限の可能性を実現してくれたチームの皆様に、本当に心から感謝申し上げます。たくさんの難しい局面があったにもかかわらず、見事にこの世界観を作り上げてくださって、日本中の多くの若い皆さんに勇気を与える作品にしてくださった」と感謝を口にした。

ラジオ部門

❖ラジオ部門・優秀賞

空想労働シリーズ　サラリーマンで脚本・演出をしたRKB毎日放送の冨士原圭希さん。「ヒーローと“（二面怪獣オベッカーなどの）会獣”が戦う特撮ものの体をとっていますが、私が入社5年間で見た少し寂しげな先輩方の姿をリアルに落とし込んだ社会派ドラマです」と番組を紹介した。

福井放送報道制作局専任局長の重盛政史さんは**FBCラジオスペシャル「輝く！ゴールデンエイジふくい」**について「多くの人の胸を打つ60歳以上の男声合唱団の歌声。ラジオでもチャレンジし、生きる喜びを歌に乗せている姿を追った。合唱団の方々とこの受賞を喜びたい」と思いを込めた。

TOKYO FMのゼネラルプロデューサー延江浩さんは「50年以上前のOBを訪ね、局のライブラリーを掘り起こし」て、逝去から3週間で**小澤征爾追悼番組「セイジ、フォーエバー」**を作りあげてオンエア。マエストロのオーラの深さにも触れつつ、喜びを込めて先生を送り出せたと語った。

❖ラジオ部門・大賞

ごんべんに化けると書く“訛り”は変化の帰結という説もあるが、**SBSラジオギャラリー「方言アクセントエンターテインメント～なまってんのは、東京の方かもしんねーんだかんな～」**が紹介したのは、アクセントに決まりがない言葉こそが日本語の祖型じゃないかという説。「栃木弁や宮崎弁の方に『訛ってるね』と言うのは言いがかりかも。冤罪を晴らしてあげたかった」「方言を残す活動を全国の地方局に是非やっていただきたい」と大賞に輝いた静岡放送編成業務局次長・アナウンサー野路毅彦さん。トロフィーを手に目を輝かせた。

司会は第56回DJパーソナリティ賞の鬼頭里枝さん（左）と第59回同賞の森谷佳奈さん

報道活動部門

❖報道活動部門・優秀賞

自身が小学校のPTAや保育園の父母会に関わったのが**キャンペーン「かわるPTA」**のきっかけだったという東海テレビ放送報道部主査の岩佐雄人さん。「税金で買うべき物をPTAが集めたお金で買っている。教育予算が足りないのが一番の問題で、予算を増やす動きに繋がりました」

UberEatsを週3日利用するというCBCテレビ報道部記者の柳瀬晴貴さん。トゥレット症の配達員と出会い、**トゥレット症に関する一連の報道活動**に取り組んだ。「自分も街で見ると距離を取っていた一人だった。同じように誤解している人は多いかもしれない。知ることは大切だと実感しました」と語った。

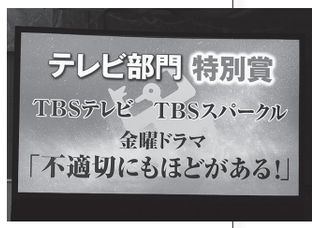
❖報道活動部門・大賞

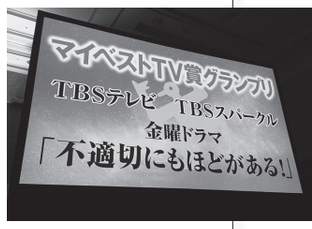
日本放送協会**「NHKアナウンサーの命を守る呼びかけ」に関する一連の取り組み**について、アナウンス室チーフ・アナウンサー井上二郎さんは「東日本大震災をきっかけに全国500人を超えるNHKアナウンサー、局のプロフェッショナルのみならず行政や研究者、さらには全国の遺族の方にも話を聞いて、命を守る言葉を模索し続けた」「その結果生まれたのが、強く、そして命令口調で呼びかける言葉だった」「まさか、そういう言葉を使う日が……と心のどこかで思っていたが、今年元日に能登半島地震が発生し、震災以降に入局した若いアナウンサーが、先輩たちの思いを受け継いで、あの言葉を発した」と振り返った。

写真上）大賞を受賞したNHKアナウンサーの皆さん

テレビ部門特別賞 & マイベストTV賞グランプリ

TBSテレビ　金曜ドラマ「不適切にもほどがある！」





左から）ディレクターの金子文紀さん、プロデューサーの磯山晶さん、天宮沙恵子さん、主演の阿部サダヲさん

「不適切にもほどがある！」は、一般視聴者が参加して選ぶ「マイベストTV賞グランプリ」とテレビ部門の「特別賞」をダブル受賞。TBSスパークルのプロデューサー磯山晶さん、TBSテレビのディレクター金子文紀さん、そして主演の阿部サダヲさんが、壇上に２回登場した。

マイベストTV賞のプレゼンターは投票に参加した大学生。「親の世代が本当にこんな世界だったのか。こんな番組があったのかと、とても驚き」ながら楽しみに見ていたという。

磯山さんは「私は昭和に生まれ、平成に就職し、令和まで放送局で働いていますが、その間に適切と不適切の境目がすごく変わっていくのを感じたので、それをテーマにしました」「最初のセリフが『おい起きろブス、盛りのついたメスゴリラ』。本当にドキドキしましたが、宮藤官九郎さんのこの攻めの姿勢を守んなきゃいけないと思ったし、守りに入らないでよかったと今日改めて思っております。この世界観を実現できたのは、スタッフとキャストの皆さんの才能と努力の賜物です」と語った。

演出の金子さんは、ミュージカルシーンの狙いについて「ドラマでテーマやメッセージを訴えると説教臭かったり辛気臭かったりしていやだなと思うんです。ミュージカルなら面白いなかで伝わるし、字幕が出るのでむしろセリフより伝わるかもと思いました。やっていて楽しかったですね」

阿部サダヲは「僕は昭和で、テレビでおっぱい見てたんで、いい時代でしたよね。あ、これ生配信でしたっけ?」と笑わせ、２度目の登壇でも「僕もビンタされすぎてニキビができて、ニキビがおっぱいに見えて、あ、生配信?」と観客を沸かせた。

文／飯田みか　写真／岩尾克治、官野 貴、花井健朗、船元康子